目に力 レンズ越しキラリ

「県ろう者写真倶楽部」活動2年目

聴覚に障害がある人に写真の撮り方を教える「県ろう者写真倶楽部」を熊本市の写真家吉岡功治さん(58)が開いている。「カメラを通じて社会に目を開いてほしい」との思いで、部員として参加する7人とともに自然風景や史跡にレンズを向ける。部員たちは全国聴覚障害者写真コンテスト（全日本ろうあ連盟主催）への出品をめざしている。

（阿部峻介）

吉岡功治さん（中央）が手話通訳（右）を交えながら撮影法を教える＝熊本市本丸の熊本城

1月下旬の撮影会場は熊本城。吉岡さんが「天気がいいので石垣が映えます。光と影をうまく利用してください」と参加した6人に語りかけると、原田慶子さん(60)が手話で通訳した。

クスノキの影が映る石垣や、石垣の斜線と青空に浮かぶ雲に吉岡さんがレンズを向けると、何人かが後ろで同じようにカメラを構える。吉岡さんは写真をデジタルカメラの画面で見て「もっと明るい設定にした方がいい」「主役は一つ。欲張っちゃだめ」などと指導した。

倶楽部は07年9月、吉岡さんが財団法人県ろう者福祉協会に提案し、協会機関紙で部員を募集して発足した。ボランティアで月1回、撮影会や品評会を開き指導する。荒尾市の旧三井三池炭鉱・万田坑跡や菊池渓谷、大分県竹田市の白水の滝などを訪れた。

一度決めた対象からしばらく離れない執着心。目に込めた力。吉岡さんが言葉を発するたび、じっと口元を見つめて理解しようとする姿に『見る』行為にとりわけ懸命な彼らなら、きっといい写真を撮れる」と感じる。

吉岡さんは約10年前、知的障害者施設から成人式の記念撮影を頼まれた。重度の障害があり全員が寮生活の入所者たちは、自分たちの晴れ着の写真に声を上げて喜んだ。「わずかでも、写真が人に生きる力を与えられる。そのことを多くの人に伝えたい」

部長の渡邉雅信さん(38)は、週末は飛行機と風景を絡めた写真を撮りに出かけるといい、「カメラが生活の一部」。佐藤民樹さん(65)は昨年の全国コンテストに阿蘇のつららの写真を出し、約150人中2位の準特選になった。「川や滝、動物を撮りに妻と外出する機会が増え、世界が広がった。写真を撮るのに耳が聞こえないことは不利にならない」と語る。

今年のコンテストには「腕試しをしたい」と部員全員が出品し、入選作は6月に茨城県である全国ろうあ者大会で展示される。吉岡さんは「写真は常に現実の対象と向き合う。発見や出会いがある」と話す。今月28日には熊本市の県聴覚障害者情報提供センターで品評会もある。問い合わせは県ろう者福祉協会（096・383・5587、ファクス096・384・5937）へ。

熊本の吉岡さん主宰 全国コンへ出品目指す

㊤佐藤民樹さんが阿蘇の仙酔峡で撮影し、08年の第23回全国聴覚障害者写真コンテストで準特選になった「滝の氷柱（つらら）」＝08年1月3日撮影㊦熊本空港から夕日に向かって離陸する飛行機をとらえた渡邉雅信さんの作品「クライマックス」。飛行機の専門誌「月刊エアライン」に掲載された＝07年11月24日撮影